# 農地改革後の東北農村における家と女性—竹内農村社会学の再評価によせて—

東北大学大学院情報科学研究科　細谷　昂

この報告は、日本農村社会学の伝統をふまえる立場からおこなわれる。したがって、家族社会学あるいはフェミニズムの立場とは、むろん課題をを通底させながらも、問題のたて方において異なる点があるであろうことを、はじめにお断りしておきたい。

*

農地改革後の家については、農村社会学の分野においても、しきりにとりあげられた。背景には、当時さかんにおこなわれた「封建遺制」あるいは「家父長制」等の論議があった。しかし、そのなかにおける女性の地位と役割についての農村社会学者の研究は、意外に少なかったように思う。ジャーナリズム等においては、しきりに論じられていたにもかかわらず、である。

そのような数少ない研究として、竹内利美の仕事をとりあげたい。農地改革後の秋田県の農村を対象に、個別の家のなかの、女性を含む各成員の地位と役割を解明した仕事と、東北地方各地の農漁村を対象に、そのような家における各成員の地位に対応した村組織の編成、つまり性・年序別組織に関する研究と、がそれである。そこに「嫁」、「姑」という家における女性の地位と、それに対応する彼女たちの村組織とが、解明されている。

このように竹内が、家における個々の成員の地位と役割に着目して、その視点から村組織をもみていこうとしたについては、竹内農村社会学の独自の方法的立場がかかわっていた、と報告者は考えている。すなわち、「小農」視点ともいうべき立場がそれである。

竹内によれば、昭和初期に始まる東北農村の家に関する研究は、「封建遺制論争」を契機として開始されたために、「名子制度やいわゆる大家族の究明に、おのずからその関心がかたむき、そのフィールドにもいきおい旧南部領下の村々が主としてとりあげられる結果になった」。しかし、東北農村で一般的だったのは、むしろ「寄生地主制」下の水稲単作地帯の村々であり、そこにおいては「小農経営」がはやくから普遍化していた。こうして竹内は、かれのいう「小農」に視点をあわせるが、その場合の「小農」とは、端的にいって、個別の家が、その自前の経済と労働力によって懸命に自立経営につとめている、そのような農民経営にほかならない。

竹内が、個別の家における各成員の地位と役割の解明にむかったのは、各成員がその地位に応じてしかるべき役割をはたしているからこそ、きびしい条件のなかにもかかわらず自立経営がなりたっているのだ、という点を重視したからであった。そこから各成員の地位に応じた村組織、つまり性・年序別組織に目がむいていくのも、必然だったといえよう。

このような竹内のいわば「小農理論」は、有賀喜左衛門や喜多野清一の、むろんたがいに立場はちがうが、一般に「同族理論」といわれている接近法と、相互補完的な視点を提供したものと評価しうるであろう。

*

この報告では、このような竹内利美の研究によりながら、農地改革後の東北農村における家と女性の状況についてみることにしたい。そのうえで、その後の変化のおおすじ、いわばその論理と、そして今日たちいたっている状況について、時間の許す範囲で私見をつけくわえることにしよう。